

現代日本語動詞のアスペクトについての考察

—動作・作用の過程を中心として—

盧 顯 松

日語日文學科

(1983. 9.30 接受)

〈要 約〉

本稿は現代日本語動詞のアスペクトを取り扱うのにおいて重点を動作・作用の過程に置き、その過程を区分して各過程に該当するアスペクトはどのような言い方によって表わされるかを考察して、各過程を表わす諸形式の間にはどんな関係があるかを糾明した。

現代日本語動詞의 아스펙트에 관한 考察

—動作・作用의 過程을 中心으로—

盧 顯 松

日語日文學科

(1983. 9.30 接受)

〈要 約〉

本稿는 現代日本語動詞의 아스펙트(aspect)를 다룬에 있어서 重點을 動作・作用의 過程에 두고 그 過程을 區分하여 各過程에 該当하는 아스펙트는 어떠한 방식에 의해 表現되는가를 考察하고, 各過程을 나타내는 아스펙트의 諸形式間에는 어떠한 關係가 있는가를 糾明하였다.

I. 緒 言

事物の運動はどのような運動形態のものでも一定の時間内に位置を占めるものである。そして、人間は、たとえば、その運動を時々刻々変化する過程に注目しながら認識をすることもできるし、そうした過程を捨象してあたかも一時点におこったものであるかのごとく全体を統一的に認識することもできるし、その運動が残す結果の面からその運動を認識することもできる。

このような運動についての認識のしかたの差異は、

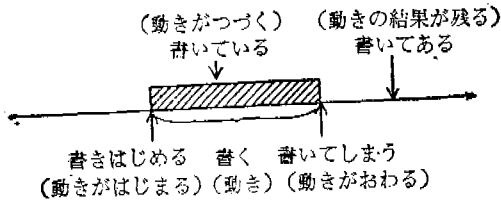
人間の認識自体をいくつかにはっきり区分するといったものではなくて、多分に相対的な差異なのであるが、こうした差異が文法的な形をとって言語に反映されることもある。このように、認識論的差異が文法的事実を生み出している場合、この文法的事実をアスペクト (aspect) と呼ぶ。⁽¹⁾ 即ち、動詞の表わす動作が一定時点においてどの過程の部分にあるかをあらわす、動詞の形態論的なカテゴリである

たとえば、「書きはじめる」は書く動作がはじまることを、「書いている」は進行の途中にあることを「書いてしまう」は動作がおわりまでおこなわれることを、「書いてある」は動作終了後に一定の結果が残っている

(1) 松村明編。日本文法大辭典。p.3. 明治書院。1971.

用語としては、外來語「アスペクト」のほか、漢語譯「態」、ときに「相」があり、また鈴木重幸氏は和語「すがた」を用いている。

ることを表わす。これを図式的にしめせば次のようになるだろう。



しかし、金田一春彦氏は、上のように、アスペクトが必ず動作・作用の過程を持つのではないと考えて、過程を持たないアスペクトについてもふれている。即ち、氏は、アスペクトを大別して、何かがある状態にあることを表わす「状態相のアスペクト」と、一種の動作・作用が行われることを表わす「動作相のアスペクト」とに分け、それぞれ、状態相のアスペクトには、(1) 既然態 (2) 進行態 (3) 反復進行態 (4) 将然態 (5) 単純状態態、のように五つの種類を、動作相のアスペクトには、(1) 終結態 (2) 既現態 (3) 始動態、(4) 将現態 (5) 単純動作態 (6) 継続態 (7) 反復継続態、のように七つの種類を挙げているが、この中で単純状態態・単純動作態というものがほかならぬ過程を持たないアスペクトである。⁽²⁾ 本稿では、アスペクトに関する重点を動作・作用の過程に置き、その過程を区分して各過程に該当するアスペクトはどのような言い方によって表わされるかをふれてから、おわりに各過程を表わすアスペクトの諸形式の間にはどんな関係があるかを考察しようと思う。

II. アスペクトを表わす諸形式

テンス(tense)やムード(mood)がせまい意味の語形によって表わされるのにたいして、アスペクトは次のように、文法的な単語づくりによって表わされる。

1. アスペクト動詞(すがた動詞)

これは第一なかどめに、たすける動詞をくみあわせてつくる。

～している

ゆうやけ空を一わのつるが飛んでいる。

教室の花びんがわれている。

彼は毎朝バイブルを読んでいる。

山が後にそびえている。

～してある

黒板に字が書いてある。

かべに絵が掛けてある。

とこのまにいけ花がかさってある。

～してしまう

一冊の本を五分で読んでしまう。

私は原稿を書いてしまった。

電気が消えてしまう。

死んでしまう。

～しておく

ストーブをつけているあいだは、窓をすこしあけておきなさい。

うるさいから、まだそこであそばせておこう。

～してくる

いままでずっとがまんしてきたが、……

これまでに何回も注意してきたが、……

雨がふってきた。

～していく

きりがすこしずつはれていく。

物価は毎日のようにあがっていく。

これからどうやってくっていこうか。

2. アスペクトを表わすあわせ動詞

これは第一なかどめに、「はじめる」「つづける」などの動詞を接尾語のようにつけてつくる。

～しはじめる

本を読みはじめる。

花が咲きはじめる。

～しだす

かれは考えたあとではしりだす。

急に笑いだす。

～しかける

観客が席を立ちかけた。

かのじょは自分の心の平静をうしないかけた。

～しかかる

いったんなしかかった仕事を、中止してはいけない。

亭主にそんなことをさせてもよいもんかとほとんど口でかかった。

(2) 金田一春彦・日本語動詞のアスペクト参照、むぎ書房刊、1976。

～しつづける

終わりのベルが鳴るまで書きつづけた。
聴衆にやじられたが、かれはうたいつづけた。
將軍連が死につづけた。

～しつづく

雨が毎日よくあきもしずじめじめとふりつづいた。

～しとおす

そんな体で、どうしてあんなふうにはたらきとおし、がんばりとおしてられるのか。

～しおわる

何度も書いて消したりしてやっと書きおわった。
帯をむすびおわってからも、女は……

～しやむ

わらいやむと、松下は……
なきやんで、はじめて両手をついて……

～しきる

きのう借りた本を読みきった。
手紙を書ききってから、それをもってゆうびんきょくへ行った。

～しあげる

きょうじゅうにかきあげます。
仕事をしあげる。

3. その他の手づき

形態論的なてづきと、構文論的なてづきがある。

～しつづある

台風はゆっくり北上しつづある。
一人では生きられなくなりつづある。

～するところだ

やっと思いたくができて、これからでかけるところです。
これから食事にするところです。

～している(いた)ところだ

きみがこないで、こまっていたところだ。
いまとくいの料理をつくっているところです。

～したところだ

ちょうどしたくができたところですから、めしあがってってください。
今帰って来たところだ。

～するばかりだ

もうでかけるばかりになっています。

汽車は駅に入るばかりの所で止まってしまった。

～したばかりだ

私もいまついたばかりです。
ねむいよ。夜があげたばかりじゃないか。

～しようとする(しようとしている)

とけいが十時を打とうとしている。
本を読もうとしている。

死のうとする。

～しそうだ

雨がふりそうだから、せんたくものをかたづけよう。
たなから本がおちそうだ。

4. もとになる動詞

もとになる動詞もアスペクトを表わす。

二時まで待った、先へ行く。
中央に三階づくりの堅固な例の皇樓がある。
うつくしい東洋の満月のさしこむ硝子ばりの水族館のような箱のなかで、いつのまにかねむってしまった

III. 過程を持つアスペクトの使い分け

過程を持つアスペクトを使い分けるために、動作・作用の過程を次のように五つの部分に分けて考えてみた。

1. 動作・作用の起こる直前にあることを表わすアスペクト

この過程を表わすアスペクトは状態に関するものと動作に関するものとに分けることができるが、まず、状態に関するものについて考えてみることにする。これは「ある動作・作用がまだ起こらないが、起こる前の状態にある」ということを意味する言い方で、金田一氏が「将然態」と呼んだものである。英語で“He is going to read a book.”における“to be going to～”という形が表わすもので、日本語において、これを表わす言い方は、

本を読もうとしている。

においてのように「～しようとしている」という形がある。この「～しようとしている」の形が表わす意味には元来二つの場合があるが、一つはこの将然態の意味を表わしている場合であり、もう一つは何者か

の意図を表わしている場合である。「本を読もうとしている」の場合にはそのうちのいずれとも取れるけれども、

時計が三時を打とうとしている。

においての「しようとしている」の形は意図をわざと、純粋な将然態の意味を表わしている。

将然態を表わす言い方としては、なお、
本を読むところだ。

においての「～するところだ」の形や、

三時を打つばかりだ。

においての「～するばかりだ」の形や、

たなから本がおちそうだ。

においての「～しそうだ」の形や、その他、

死につつある。

においての「つつある」の形などを考えられるが、これらはみんな瞬間動詞、又は瞬間動詞的に用いられた継続動詞だけに作り得る。⁽³⁾ たとえば、「～つつある」の形が「死ぬ」のような瞬間動詞でなく、「読む」のような継続動詞に付いて「読みつつある」のようになると、これは、将然態の意味でなく、次に述べる「動作・作用のつづいていることを表わすアスペクト」になるのである。

次に、動作に関するアスペクトについて考えてみよう。

これは、「ある動作・作用が‘～する’寸前の状態に達する」という意味で、金田一氏が将現態と呼んだものである。これを表わす言い方としては、

死にかける。

電気が消えかける。

においてのように「～しかける」の形がある。この「～しかける」の形は継続動詞につくと、次に述べる「動作・作用の始まることを表わすアスペクト」になるが、瞬間動詞につくと将現態になる。すなわち、継続動詞「読む」に「かける」がついて「読みかける」になると、これは「読みはじめる」という動作・作用の始まることを表わすアスペクトになるが、瞬間動詞に付いて「死にかける」のようになると、これは「死にはじめる」という意味でなくて、「死ぬ寸前の状態に達する」という意味になる。

しかし、始まるを表わす「読みかける」が将現態と

しても用いられる場合がある。たとえば、

本を読みかけてやめた。

という文があれば、これは、一部分を読んでやめた意味にもなるが、全然目を通さないうちにやめた意味にもなる。あとの場合は、「読む」という動詞を瞬間動詞的に用いた例で、この方の「読みかける」は、「将現態」である。

将現態を表わす言い方としては、なお、

死にかかる。(=死にかける)

消えかかる。(=消えかける)

においての「～しかかる」の形や、

死のうとする。

消えようとする。

においての「～しようとする」の形などがある。

以上に述べたように、動作・作用の起こる直前にあることを表わすアスペクトはⅡ項の諸形式の中であわせ動詞と文法的な手つづきによって表わされる。

2. 動作・作用の始まることを表わすアスペクト

この過程を表わすアスペクトは動作に関するもので、佐久間鼎氏が「始動態」と呼んだものである。⁽⁴⁾

これは、ある動作・作用の始まりを表わすもので、日本語において、これを表わす言い方としては、

書きはじめる、

降りだす。

読みかける。

においてのように「～しはじめる」、「～しだす」、「～しかける」という形などや、

雨がふってきた。

においての「～してくる」の形があげられる。この「～してくる」の形は、次に述べる「動作・作用のつづいていることを表わすアスペクト」としても用いられる場合があるから、使いわけに注意をしなければならない。

なお、この形で、「始まる」という以上は、その動作・作用はある時間だけ継続して行われるものであるから、その動詞は、継続動詞でなければならないということになる。この形の中で「～しかける」の形が瞬間動詞につく場合、将現態になることはさきに述べたとおりである。

この「動作・作用の始まることを表わすアスペクト」

(3) 金田一氏は、アスペクトを説明するために、動詞を動作・作用がある時間の間継続するようなものを表わす継続動詞とその動きが起って瞬間的に終わるようなものを表わす瞬間動詞とに分けて考えた。

(4) 日本語教育學會編、日本語教育事典、p.189、大修館書店。

はⅡ項の諸形式の中でアスペクト動詞とあわせ動詞によって表わされる。

3. 動作・作用のつづいていることを表わすアスペクト

この過程をあらわすアスペクトも 状態に関するものと動作に関するものに分けて考えられるが、まず、状態に関するものから考えてみよう。

動作・作用が「つづいている」というのは動きがその過程の途中にあることを言う。つまり、ある動きが始まって、まだ終わらない状態にあることを言うのである。例えば、「読む」という動作はある時間的長さの過程であって、「読んでいる」はその「読む」という動作が始まってから終わるまでの過程の途中を表わすのである。

この過程を表わすアスペクトを松下大三郎氏は「進行態」と呼んだ。⁽⁵⁾日本語において、このアスペクトを表わす言い方としては、上の「読んでいる」の例のように動詞プラス「ている」の形が標準的な形である。が、この形は後に述べる動作・作用の結果を表わすアスペクトと動作・作用の起こりに全く無関係で、状態そのもの、形容詞の意味を表わすアスペクトと同じ形なので、使い分けに注意しなければならない。即ち、この「～している」の形は接続する動詞の性質(継続動詞か瞬間動詞か)によってその意味がらがるのである。この問題については、後の「結果を表わすアスペクト」でふたたび述べることにする。このアスペクトを表わす言い方としては、そのほか

本を読んでるところだ。

においての「～しているところだ」という形、

本を読んでいる最中だ。

においての「～している最中だ」という形、

読書中だ。

においての「～中だ」という形があり、

本を読みつつある。

においてのように「～しつつある」という形もある。ただし、この「～しつつある」という形が瞬間動詞につく場合には、さきに述べたように将然態を表わすようになる。それゆえに、この過程の意味を表わす動詞は動作・作用を表わす動詞の中で、更にその動作・作用がある時間の間、継続するような動作・作用

である動詞、即ち継続動詞に限る。

なお、このアスペクトの一種ともいうべきものに、金田一氏が「反復進行態」と呼んだ、ある動作・作用がくり返し行われていることを表わすものがある。即ち、

この頃は栄養失調で人がどんどん死んでいる。

彼は毎朝バイブルを読んでいる。

においての「～している」の形がこれであって、瞬間動詞、及び時間を考慮の外において用いられた継続動詞についての場合にこの意味を表わす。例文の中の「死ぬ」が瞬間動詞で、「読む」が時間を考慮の外において用いられた継続動詞である。

次は、動作に関するものについて考えてみよう。

これは、動作・作用がある時間継続して行われることを表わすもので、金田一氏が、「継続態」と呼んだものである。これを表わす言い方としては、

三時間読みつづける。

先刻から書きつづけている。

においての「～しつづける」の形があり、

二時まで待った、先へ行く。

においてのように「もとになる動詞」によっても表わし得る。また、

いまですとがまんしてきたが、もうがまんできない。

きりがずこしずつはれていく。

においてのような「～してくる」「～していく」の形もあげられる。この場合、「～してくる」は、問題になっている時点にむかって動きが進行する過程を表わし、「～していく」は、その時点からあとにむかっての進行過程を表わす。ただし、「～してくる」の形はさきに述べたように始まりを表わすアスペクトとしても用いられる。

然るに、ここで問題になることは「～している」の形の場合である。即ち、この「～している」の形を進行態と見るか、そうでなければ、継続態と見るかということである。佐久間鼎氏はこれを動作に関するものと見て継続態としているが、金田一氏は状態に関するものと見て進行態としている。⁽⁶⁾この稿では「～している」の形を状態に関するものと見て進行態とした。

なお、この「動作に関するアスペクト」にも、状態

(5) 日本語教育学会、日本語教育事典、p.188 大修館書店 1982。

(6) 金田一春彦編、日本語動詞のアスペクト、d.53、むき書房刊、1976。

に関するアスペクトのように、ある動作・作用がくり返し行われることを表わすものがある。これを金田一氏は「反復継続態」と呼んだ。これを表わす言い方は、

將軍達が死つづけた。

あれこれ本を読んできたが、……

においてのように、上で述べた「～しつづける」「～してくる」の形がこの意味としても用いられ、また、

毎日毎日本を読む。

字を書き書きする。

においてのように、もとになる動詞や、なかどめの形を重ねたものに「する」をつけた形もこの意味を表わす。

さて、上の継続態は継続動詞だけが持っているが、反復継続態は、瞬間動詞、及び時間を考慮の外において用いられた継続動詞がともに取り得る。

以上のように、動作・作用のつづいていることを表わすアスペクトは、Ⅱ項の諸形式の中で四つの形式すべてによって表わされる。

4. 動作・作用の終わることをあらわすアスペクト

この過程を表わすアスペクトは動作に関するもので、ある動作・作用が完全に行われることを意味する。宮田幸一氏はこのアスペクトを「終結態」と呼んだ。⁽⁷⁾これを表わす言い方としては、

一冊の本を五分で読んでしまう。

私は原稿を書いてしまった。

においてのような「～してしまう」の形や、そのほかに、「～しおわる、～しおえる、～しきる、～しあげる、～しとげる」の形などのように、あわせ動詞によるものがある。

然るに、上でこのアスペクトはある動作・作用が「完全に行われる」ことを表わすと書いた。それゆえに、このアスペクトを取り得る動詞はその動作・作用がある時間の間継続するものでなければならない。つまり、終結態を取り得るのは、継続動詞に限ることになる。

ところで、実際には、「死んでしまう」のように、瞬間動詞が「～してしまう」の形を取る場合があるが、それでは、これは何を表わすものであろうか。

この「死んでしまう」の意味をよく考えて見ると、こ

れは継続動詞についての「～してしまう」の形と同じものではない。これは「その動作・作用がかりそめでなく本当に行われる」ということ、つまりその動作・作用が実現する」ということを表わしているのである。「本当に行われる」という意味であるから、裏には「もとに戻る望みはない」とか「残念だ」とかいう意味がふくまれていることが多い。「消える」も、「電気が消える」という時の「消える」は瞬間動詞であって、これが「電気が消えてしまう」のようになると、その意味は「電気が消滅を実現する」ということを表わすようになる。金田一氏は、この「本当に行われる」ということを表わす「～してしまう」の形を「既現態」と呼んだ。

以上のことをてっとり早く言えば、「～してしまう」という形には「終結態」と「既現態」との二つの態があり、「終結態」は継続動詞に現れ、「既現態」は瞬間動詞に現れるということになる。

さて、以上のとおり、動作・作用の終わることを表わすアスペクトは、Ⅱ項の諸形式の中でアスペクト動詞とあわせ動詞によって表わされる。

5. 動作・作用の結果を表わすアスペクト

この過程を表わすアスペクトは状態に関するもので、松下大二郎氏が「既然態」と命名したものである。⁽⁸⁾

ここで「動作・作用の結果」というものは、以前起こった動作・作用の結果がまだ存続しているという状態を表わすものである。英語においては、「He is gone.」などに見られる「“to be”+自動詞の過去分詞」の形によって表わされるアスペクトであるが、日本においてこれを表わす言い方は、

教室の花びんがわれている。

においてのように、動詞プラス「ている」の形がある。しかし、さきに述べたようにこの「～している」の形がみんな既然態を表わすものではない。「～している」の形は接続する動詞の性質によって、その意味がちがうのである。

「～している」の形が継続動詞に付いて進行態になることはさきに述べたとおりであるが、この形が既然態を表わす場合は、動詞のうちで動作・作用を表わす動詞、それも、起こって瞬間的に終るような動作・作用を表わす動詞、或いは動作・作用の経過に

(7) 日本語教育学会、日本語教育事典、p.189、大修館書店、1982。

(8) 日本語教育学会、日本語教育事典、大修館書店、p.189

要する時間を無視して用いた動作・作用を表わす動詞に付いた形に限る。(9) 例えば、

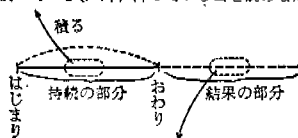
雪が積っている。

の「積る」も元来は継続動詞であって、戸外に降っている雪を眺めながら、

とんどん雪が積っている。

という時には、さきに述べた進行態を表わす。「雪が積っている」が既然態を表わすのは、もう雪がやんでしまっている、その時の積雪を見て、「雪が積っている」というような場合である。それは「積る」が瞬間動詞として用いられた場合である。これを図式的にしめせば、このタイプの動詞のばあいは、次のようになるだろう。

雪が積っている(戸外に降っている雪を眺めながら言う時)



雪が積っている。(もう雪がやんでしまっている、その時の積雪を見ていう時)

なお、この結果を表わすものとしては、

かべに絵が掛けてある。

においてのような「～してある」の形がある。この形に用いられる動詞は、働きかけた結果を対象にのこすような意志的な動きを表わす他動詞にかざられる。したがって、

この泉の水はのんである。

のような表現はない。また、

私はストーブをつけているあいだは、窓をすこしあけておく。

においてのような「～しておく」の形もある。この用法も、対象に変化の結果をのこす意志的な動きを表わす他動詞にある。そのほか、

ご飯を食べたところだ。

においての「～したところだ」の形、

いまついたばかりだ。

においての「～したばかりだ」の形などがある。

以上のとおり、動作・作用の結果を表わすアスペクトは、Ⅱ項の諸形式の中でアスペクト動詞と文法的な手づつきとによって表わされる。

Ⅱ. 過程を持たないアスペクト

今までのように、本稿はアスペクトの種類を、動作過程に重点を置き、その過程を分けて各過程に該当するアスペクトを中心として述べてきたが、アスペクトにはこれらの動作・過程に該当するもの以外に動作・作用の起こりに無関係なものがある。例えば、動作・作用の発生・終結とは全然無関係であり、状態そのもの、形容詞的意味を表わすものとか、単に動作・作用そのものを表わすものとかという場合がそれである。金田一氏は前者を単純状態態、後者を単純動作態と呼んだ。(10)

まず、単純状態態とはいかなるものかについて考えてみよう。それは、

この道は曲っている。

山が後にそびえている。

秀吉の顔はさるに似ている。

というような表現で、「～している」の形によって表わされるアスペクトである。この「～している」の形は、さきに述べたように、動作・作用を前提にしてその動作・作用がつづいていることやその結果の状態を表わすアスペクトであった。が、ここでは「～している」の形が動作・作用の前提を問題にしない、単なる状態を表わす動詞についた場合である。これについて、金田一氏は次のように説明している。

「この道は曲っている」という時、道が湾曲運動を起こしていることを意味しているのでもなく、道が何らかの原因で曲った、その結果の状態を意味しているのでもない。単に道が非真直の状態だということを意味している。「～している」の形がこのような形容詞的な意味を表わす場合、もとの動詞「曲る」は動作も作用も表わさず、過程などは問題にならない。(11)

そのほか、このアスペクトを表わす言い方としては、木がある。

この箱は大きすぎる。

においての「ある」とか「～すぎる」とかいう形や、

白い。美しい。

とかいう形容詞の単独の形や、

(9) 金田一春彦, 日本語動詞のアスペクト, p. 40, 参照。むぎ書房刊 1976年。

(10) 氏は、「この行き方は数学でいったら、ゼロを数の一つと見るようなものである。」と言って、これらをアスペクトの一種と認めている。

(11) 金田一春彦, 日本語動詞のアスペクト, p. 45.

薪かだ。人間だ。

とかいう「一だ」の形などがあげられる。つまり、この単純状態態は動作・作用を表わす動詞ではなく、状態を表わす動詞、形容詞、及び「一だ」の形にある。

次に、単純動作態というものは「始まる」とか「終る」とかいうことを全然離れてただ動作・作用を表わす形で、つまり「読む」とか「書く」とか、或は「死ぬ」とか「消える」とか、動作・作用を表わす動詞単独の形がこのアスペクトを表わす。この単純動作態を取り得るものは、動作・作用を表わす動詞だけである。即ち、上の単純状態態を取り得る語は単純動作態を取り得ず、単純動作態を取る語は単純状態態を取り得ないということになる。

V. 結 び

以上、日本語の動詞におけるアスペクトを動作の過程に分けて、その過程に該当するものを中心として考察してみたが、その結果、アスペクトを表わす諸形式の間には次のような関係があることが分かる。

1. 日本語には「ところ」という形式名詞があって、それが「～した」の形につくか、「～している」の形につくか、ただの「～する」の形につくかによって、三つの状態に関するアスペクトを表わし別けていることを示す。即ち、「～するところだ」は動作・作用のおこる直前にあることをわす将然態、「～したところだ」は動作・作用の結果を表わす既然態、「～しているところだ」は動作・作用のつづいていることを表わす進行態になる。

2. 「～しようとしている」の形と「～しようとする」の形は同じ過程に属するが、全く別のもので、「～しようとしている」の形は状態に関するものとして動作・作用のおこる直前にあることを表わす将然態になり、「～しようとする」の形は動作に関するものとして動作・作用のおこる直前の状態に達するという意味を表わす将現態になる。

3. 「～しつつある」の形は接続する動詞の性質によって二つの状態に関するアスペクトを表わす。即ち、「～しつつある」の形が継続動詞につくと、動作・作用のつづいていることを表わす進行態になり、瞬間動詞につくと、動作・作用のおこる直前にあることを表わす将然態になる。

4. 「～している」の形は接続する動詞の性質によって四つの状態に関するアスペクトを表わす。即ち、「～している」の形が継続動詞につくと、動作・作用がつづいていることを表わす進行態になり、瞬間動詞につくと、動作・作用の結果を表わす既然態になるが、場合によって、瞬間動詞、及び時間を考慮の外において用いられた継続動詞につく時は動作・作用がくり返し行われていることを表わす反復進行態になる。また、これが動作・作用の起こりに全く無関係で、単なる状態を表わす動詞につく場合には単純状態態になる。

5. 「～しかける」の形は接続する動詞の性質によって、二つの動作に関するアスペクトを表わす。即ち、「～しかける」の形が継続動詞につくと、動作・作用の始まることを表わす始動態になり、瞬間動詞につくと動作・作用のおこる直前の状態に達するということを表わす将現態になる。

6. 「～してしまう」の形は接続する動詞の性質によって二つの動作に関するアスペクトを表わす。この二つのアスペクトは動作・作用が終ることを表わす点においては同じであるが、その意味上においてはすこしちがう点がある。即ち、「～してしまう」の形が継続動詞につくと、動作・作用が完全に行われることを表わす終結態になるが、瞬間動詞につくと、動作・作用がかりそめでなく本当に行われることを表わす既現態になる。この既現態は、「本当に行われる」という意味であるから、裏には「もとに戻る望みはない」とか「残念だ」とかいう意味がふくまれていることが多い。

7. 「～してくる」の形は接続する動詞の性質によって三つの動作に関するアスペクトを表わす。即ち、「～してくる」の形が継続動詞につくと、動作・作用の始まることを表わす始動態、またはつづいていることを表わす継続態になるが、瞬間動詞、及び時間を考慮の外において用いられた継続動詞につくと反復進行態になる。

さらに、今まで述べた諸アスペクトの間の関係を単に図表化すると、次のようである。

	過程の区分	名称	表わし方	接続する動詞	種類	
過程を 持つ ア ス ベ ク ト	動作・作用のおこる直前にあることを表わす	将然態	～しようとしている ～するところだ ～するばかりだ ～しそうだ	瞬間動詞	状態相	
		将現態	～しかける, ～しかかる ～しようとする	瞬間動詞	動作相	
	動作・作用の始まることを表わす	始動態	～しはじめる, ～しだす ～しかける, ～してくる	継続動詞	動作相	
		進行態	～している ～しているところだ ～している最中だ ～中だ ～しつつある	継続動詞	状態相	
			反復進行態	～している	瞬間動詞, 及び時間を考慮の外において用いられた継続動詞	澁態相
			継続態	～しつつける ～していく, ～してくる もとなる動詞	継続動詞	動作相
	動作・作用のつづいていることを表わす	反復継続態	～しつつける ～してくる もとなる動詞	瞬間動詞, 及び時間を考慮の外において用いられた継続動詞	動作相	
		動作・作用のおわることを表わす	終結態	～してしまう ～しおわる, ～しおえる ～しきる, ～しあげる ～しとげる	継続動詞	動作相
	既現態		～してしまう	瞬間動詞	動作相	
	動作・作用の結果を表わす	既然態	～している, ～しておく ～してある ～したところだ ～したばかりだ	瞬間動詞, 時間の経過を無視して用いた動詞	状態相	
過程は問題にならない	単状態	純態	～している ～すぎる ～だ, ある	単なる状態を表わす動詞、 形容詞, ～だ	状態相	
		単動作態	動詞単独の形	単なる動作・作用を表わす動詞	動作相	

参 考 文 献

- 金田一春彦編、日本語動詞のアスペクト、むぎ書房、1976。
- 久野暲、日本文法研究、大修館書店、1973。
- 慶野正次、動詞の研究、笠間書院、1972。
- 国語学会編、国語学大辞典、東京堂出版、1981。
- 佐久間鼎、現代日本語の表現と語法、恒星社厚生閣、1966。
- 鈴木重幸、日本語文法・形態論、むぎ書房、1978。
- 寺村秀夫、「テンス・アスペクト・ボイス」国語シリーズ別冊2、『日本語と日本語教育—文法編』、文化
- 庁、1973。
- 西尾寅弥、「テイルとテアル」講座現代語 6、明治書院、1964。
- 日本語教育学会編、日本語教育事典、大修館書店、1982。
- 松村明編、日本文法大辞典、明治書院、1971。
- 三上章、日本語の構文、くろしお出版、1963。
- 南不二男、現代日本語の構造、大修館書店、1974。
- 宮地裕、文論—現代語の文法と表現の研究一、明治書院、1971。
- 森田良行、「動作・状態を表わすいい方」講座日本語教育第4分冊、早稲田大学語学教育研究所、1968。